

The Beach Boys
"Surf's Up"
Brother/Reprise [US] ○RS6453
[1971] ▶キャピトル(ユニバ
ーサル) ©TOCP95013
incl. 'Don't Go Near The
Water'

にも使われるような引用句になった。このアルバムが出されたころ、まだ子供だった俺は、*Surf* という単語を使ったこの歌詞を面白がってよく歌っていたが、歳をとって初めて、この曲のテーマに気がついた。また、このアルバムには「motherfucker」をはじめ刺激的な言葉が並んでいたから、当時のティーンエイジャーの間では曲を聴く前から話題になっていた。今なら噂になんかならないと思うが、当時としてはすごいことだったんだ。エコロジーがテーマの曲で、あえて過激な言葉多用した彼らの挑戦的な姿勢は、功を奏したと言えるだろう。

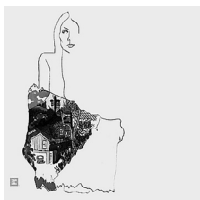
71年にビーチ・ボーイズがリリースし彼らが久しぶりの高評価を得た『サーフズ・アップ』(全米アルバム・チャート29位)にも、エコロジーをテーマにした「ドント・ゴー・ニア・ザ・ウォーター」(水の近

くに行くな)が収められている。マイク・ラヴとアル・ジャーディンによる作詞・作曲で、曲は水に近寄ってはならないなんて、悲しいことだと思わないかい? という問いかけから始まる。海も川も、みんな人間のせいで汚染されてしまっている。例えば、「Toothpaste and soap will make our oceans a bubble bath」= 僕らが使っている歯磨きも石鹸も、海を泡風呂にしてしまおう。So let's avoid an ecological aftermath」= だから、生態学的に悪いような影響をなくすようにしよう。僕らの前に生きた人々のせいにせず、今日から始めよう、僕らにできることを。実際に「ecological」という言葉を使ったシンパルな訴えかけだからこそ素直に心に入ってくる歌詞に、多くの人々が共感したことがだろう。この曲を『サーフズ・アップ』の冒頭に配置しているところに、彼らの意気込みが感じられる。モーグ・シンセを使うなど、音作りも斬新だった。

●

ジョニ・ミッチェルの「ビッグ・イエロー・タクシー」は、きつと一番知られているエコロジー関連の曲ではないだろうか。70年のヒット作『レディズ・オブ・ザ・キ

ャニオン』からのシングル・カット(全米チャート24位)。当時、彼女の曲はそれまでのフォーク調からロック調へと変貌を遂げ、その後はアメリカの70年代FMブームのスタンダードになっていく。ジョニのホームページを見ると、この曲に関していくつかの記述がある。それによれば、彼女がハワイに夜着き、翌朝起きてカーテンを開けると、遠くには緑多い山々が見えた。しかし、下を見ると、そこには大きな駐車場が広がっていた。それでこの曲が生まれたんだそうだ。それでこの曲は今も有名な言葉で始まる。「They paved paradise and put up a parking lot」= 彼らは楽園を舗装して、駐車場を作った。ピンク色のホテルとブティックと流行りのクラブが作られたことも歌われている。このピンク色のホテルとは、どう考えてみてもワイキキのランドマークでもある



Joni Mitchell
"Ladies Of The Canyon"
Reprise [US] ○RS6376
[1970] ▶リプリーズ(ワーナ
ー) ©WPCR75229
incl. 'Big Yellow Taxi'



ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第4回

エコロジーに共鳴し生み出された曲

今でこそ環境問題をテーマにした曲は日本にもあるが、欧米では1960年代の後半から、ロックのアーティストたちが環境問題やエコロジー(人間の生活と自然との調和などを目指す思想や運動)に共鳴して様々な曲をリリースしていた。ここでは、それらの中から代表的な6曲を見てみよう。すべて目線が違うので面白い。

●

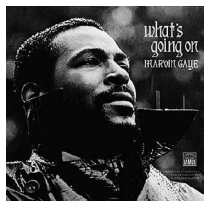
1曲目はジェフ・アソン・エプラインの「エスキモー・ブルー・デイ」。グレイス・スリックとポール・カントナーによる作詞・作曲で、69年の傑作『ヴォランティアーズ』(全米アルバム・チャート13位)の収録曲だ。アルバム全体に当時のアメリカの状況が色濃く映し出されているが、この曲で彼らは、エコロジー、そして今で言う地球温暖化による環境の変化を主なテーマとして取り上げている。

曲名を直訳すれば「エスキモーの青い日」となるが、ここでの「blue day」は「憂鬱な日」という意味だろう。曲の冒頭から「Snow cuts loose from frozen」= 氷河が溶けて崩れ落ちる、と歌われている。また最後のヴァースでは、「雪は凶暴な流れとなり、その流れの果てを地獄に落とす。あ



Jefferson Airplane
"Volunteers"
RCA Victor [US] ○LSP4238
[1969] ▶Culture Factory [US]
©CFU01030
incl. 'Eskimo Blue Day'

るひとつの場所を寒波が襲う」とあり、The human dream doesn't mean shit to a tree」= 人間の夢なんか樹木にとってはどうでもいいこと、という一節の後、氷河が割れていくような音で曲が終わっていくところで、この曲の中では先の「doesn't mean shit to a tree」というフレーズが繰り返り返されている。例えば、「You call it rain, but the human name doesn't mean shit to a tree」= それを雨と呼ぶけどそんな人間がつけた名前なんか樹木にとってはどうでもうらや」と「The human crowd doesn't mean shit to a tree」= 人間がたたく音でも木にとっては何も意味がない、といったように。ここで彼らは、人類がいなくなっても樹木=地球は生き続けるが、本当にそれでいいのか、と警鐘を鳴らしているのだと思う。非常に哲学的な詞だ。この印象的なフレーズは、その後、普段の会話



Marvin Gaye
"What's Going On"
Tamla [US] ●TS310 [1971] →
モータウン (ユニバーサル)
©UICY15061
incl. 'Mercy Mercy Me (The Ecology)'

ヴィン・ゲイが71年にリリースした『ホワツ・ゴイング・オン』のセカンド・シングル。このアルバムでマーヴィン・ゲイはセクシーなソウル・シンガーから本格的なレコーディング・アーティストになった。彼もその当時の白人のアーティストたちと同じ不安を抱き、この曲を書いたのだろう。R & Bチャートで1位にランク・イン、ポップ・チャートでも4位まで上がった。

「ジ・エコロジー」という副題がついたこの曲では、それまでラヴ・ソングを歌っていたマーヴィンらしく、新しい彼女のこのように地球を歌っている。その彼女はどこまで人間の虐待を受けて我慢できるのか。青い空はどこに行ってしまったのか。毒が風に乗っている、海には油、魚には水銀、地面と空には放射能。動物と鳥は死んでいる。この込み合った地球はどうする？

「Mercy, mercy me」神々々、お慈悲を。

僕はどうしたらいいのか。大事にしてあげられない彼女に、マーヴィンは歌を捧げる。

●

クイックシルヴァー・メッセンジャー・サーヴィスの「ホワット・アバウト・ミー」(僕はどうか?)も、エコロジーのシンボリックな曲と言えるだろう。70年にリリースされた5枚目のアルバムのタイトル曲で、アメリカ国内での内政の混乱と泥沼化したヴェトナム戦争という時代を背景にしている。

最初のヴァースは、エコロジーがテーマだ。お前は僕らのおいしい水に毒を入れた。僕らの青々とした樹木も伐採してしまった。お前が僕らの子供に与えた食物が彼らの病気の原因だ。僕らの世界は壊れてきている。だから僕らが何か行動しなければならぬ。コーラスが△どうするんだ、僕らのことを?▽とリビートするが、ここでの「僕ら」とは、「自然」のことも意味している。

次からのヴァースでは、社会の問題点を鋭く論じる。君が読む新聞は君の発想力を低下させるだけ、君が自分の信念を保ち続けるならいずれ撃たれることを覚悟した方がいい。僕は自分が生まれた土地でもまるでよそ者のように感じてしまう、僕はマリファナも吸うけれどお前の戦争の片棒は

担げない。言論の自由を抑圧したり、軍産複合体に都合のいいような仕組を作ってヴェトナム戦争を起こした前の世代に、怒りの矛先を向けている。そしてきたるべき社会に対して、人も自然も守っていかなければとテーマを投げかけている。

俺もこのバンドは何回か見たことがあるが、一番悲しかったのは、カリフォルニアのバークリーで見たライブだ。日曜と月曜という、客の入りか最も悪い曜日でのライブは悲惨だ。その上、彼らの前座のバンドは、その後、彼らより売れてしまった。そのバンドは当時まだ16〜17歳だったランナウェイイズ。しかしこの「ホワット・アバウト・ミー」は、2014年の現在にも通用する曲として生き残っている。

そう、ここで紹介した6曲は、今になっても、さらに大きな現実味を帯びて人々の耳に届いているはずだ。



Quicksilver Messenger Service
"What About Me"
Capitol [US] ●SMAS630
[1970] →キャピトル (ユニバーサル) ©TYCP80062
incl. 'What About Me'

ロイアル・ハワイアン・ホテルのことだろう。ここからコーラスが登場する。△なくすまで自分が持っていたものが、どんなに大切な存在だったか気がつかない▽。人々がうっかりしていると、環境破壊がどんどん進んでしまうことを訴えている。

次のヴァースには、樹木が伐採され、すべて博物館に入れられてしまったとある。もともと自然に生えていた樹木を見るだけなのに税金も取られてしまうと歌われるこの博物館は、ホノルルにあるフォスター・ボタニカル・ガーデンのことだ。

サード・ヴァースは、リンゴ農家への訴えかけだ。△お百姓さん、DDT(殺虫剤)をしまつてくれない? リンゴには斑点がついていてもいいの、でも鳥や蜂を残しておいて、お願いだから!▽と歌い、農業による生態系の破壊の危険性を指摘する。

最後のヴァースでは、△昨日の夜遅く、家のドアが閉められる音を聞いた。そして大きな黄色いタクシーが、私のいい人を連れていってしまつた▽と歌われる。△いつだってそう、大切なものは失くしてしまつてからから気づくよ▽と続くが、これも自分たちの大事なものは常に気を配れというアドヴァイスだ。ところで、ジョニの

故郷はカナダだが、その首都トロントの警察のパトカーは、かつては黄色かったようだ。その画像を見ると、確かに大きくいかつい車体だ。'big yellow taxi'とはパトカーを意味する可能性が高い。となれば、この部分は「当局によって大切な人を連行されてしまつた」ようなシーンも連想させる。明るい印象の曲だが、そのテーマはエコロジーだけではないのかもしれない。

●

アプローチの仕方は違うが、こんなふうな問題提起をした曲もある。キンクスのソングライター・レイ・デイヴィスお得意の皮肉たつぷりの歌詞だ。「エイ・マン」(猿人間)は70年にリリースされた「ローラ対パワーマン、マネーゴーラウンド組 第1回戦」からシングル・カットされた曲だ。アメリカではチャート・インしなかったが、イギリスでは5位まで行つたそう。この曲はソングライター・レイ・デイヴィスのマスターピースと言えるだろう。レイはこの曲で、文明社会について毒づいている。

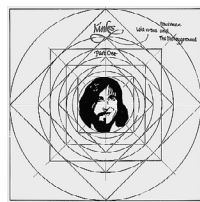
曲は△僕は洗練された人間だと思つている。正しいホモ・サピエンスとして生きているから▽という一節から始まるが、その歌詞の内容とは裏腹の自信なさげな様子を表現

するため、最初では音量を落として歌っている。

自分では教育があり文明化していると思つている。だって僕はヴェジタリアンだしね。でも人口の多さとインフレと飢餓と狂気の政治家がいるので、危険を感じている。核戦争で死にたくない、だから遠い海岸まで逃げて猿人間になりたい。この世界では窓の外を見ても空が見えない。レイはこの曲で、自分が生きている世界、音楽業界そして忙しいイギリスの街からも逃げ出したいと歌っている。人間が頭がいいと言っているのも自分たちが勝手に決めてきているだけで、猿の世界に戻つてもたいして変わらないんじゃないか、都会の生活よりも猿の世界に戻つて暮らした方が幸せんじゃないかと問いかけているんだ。

●

「マーシー・マーシー・ミー」は、マー



Kinks
"Lola Versus Powerman And The Moneygoround, Part One"
Pye [UK] ●NSPL18359
[1970] →BMG Rights Management [EU]
©88843089592
incl. 'Apeman'